

Shinjuku Public Place Chronicle

—55 HIROBAと新宿の広場史

Shinjuku Public Place Chronicle —The History of 55 HIROBA and Public Spaces in Shinjuku City

永野 真義 東京大学
Masayoshi NAGANO

湯澤 晶子 東京大学
Shoko YUZAWA

1. 「Shinjuku Public Place Chronicle」概要

新宿三井ビルディングロビーの一角に誕生したばかりのフリースペースを使ったこの展示では、来場者がコンテンツとできるだけ多く接点を持てると良いと考えた。待合やワークスペースという本来の場の機能や、気軽に立ち寄れる空間性を活かし、既成のロングテーブルに巻物のごとく設えた計19mのパネルを中心に、内部庇に吊り下げた8枚のパネル、映像展示スクリーンを組合せた。展示内容と実空間を行き来する「居ながら展示」を楽しんでもらうための会場構成である。

内容は大きく2つのパートから成る。「55 HIROBA Chronicle」では55 HIROBAの歴史を追うことで、また「SHINJUKU×HIROBA Chronicle」では新宿の広場史を振り返ることで、都市計画と広場の関係性および都市における広場の展開を身近なものとして描いた。

2. 「55 HIROBA Chronicle」

55 HIROBAはどのように誕生し、育まれているのか。過去資料を発掘し、往時のパンフレットや地域誌の実物展示、原設計者へのインタビューを通じて表現した。

来場者が歴史を追いやすいよう時系列の考察を進めながら、この広場の本質を4つに整理して紹介した。

“あくまで超高層は手段である”とする霞が関ビルから続く理念の一貫性。敷地を越えて都市環境を追求した計画者達の構想力。人間的環境を創出するための研

究と試行錯誤。そして完成後も社会に呼応して手を加え、更新しながら継承される思想などを取り上げた。

3. 「SHINJUKU×HIROBA Chronicle」

新宿には“広場”が溢れている。戦前に整備された西口の「駅前広場」に始まり、新宿駅西口広場、コマ劇前広場、西新宿副都心をはじめ数々の広場が新宿で構想され、実現し、社会に翻弄され、そして今再びリノベーションや“広場化”の文脈で注目を浴びつつある。

広場に纏わる構想、計画出来事、実践を抽出して並べ、100年以上に渡る新宿のビジュアルな広場史を表現した。また、新宿の広場に重要な役割を果たす8人のプランナーが残した言葉を内部庇に吊るパネルフラッグに並べ、展示のアイキャッチとなるようにした。

4. おわりに

人間にとっての広場的空間は、街路から続くグラウンドレベル全体、即ち屋内外に渡る。本展示を、まさに西新宿の街路からビル内部への広場的空間の連なりを見渡し、自分の居場所と都市とを関係づける内外一体のリノベーションを進めている場で開催できた事が意義深い。その関係づくりこそ広場の都市・新宿が臨むべき「人間性の回復」、更新の取組の方向性ではないか。今回の展示と実践が、様々な主体を巻き込みながら、その取組の一助になればと願う。

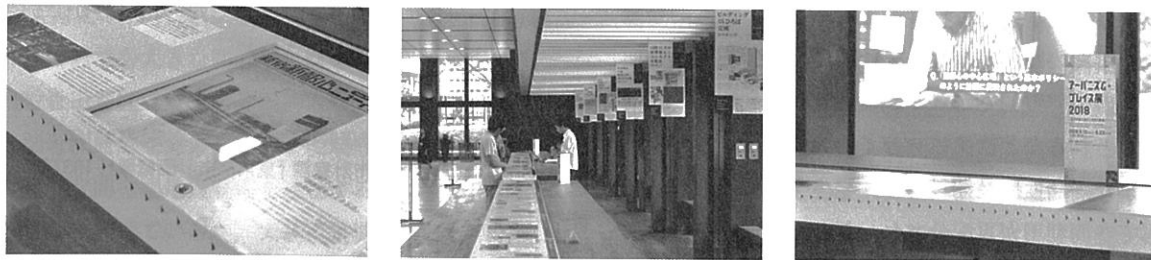


図1 「Shinjuku Public Place Chronicle」展示会場の様子

超高層は手段 目的は広場

新宿三井ビルディングは、我が国初の超高層ビルである霞が関ビルと兄弟に例えられる。両者はほぼ同じ面々で構成された建設委員会により設計検討が進められた。氷室捷爾（当時三井不動産副社長）は、超高層は手段であり「広場をつくる目的のための決断」と語ったが、霞が関では十分な広場デザインまで検討が及ばず「霞が関ビルを AUFHEBEN せよ」の一言から新宿の建設委員会を始めたという。55 HIROBA は特定街区という制度の枠組みに留まらない、超高層の真の目的としての広場という一貫した理念の結実と言える。

敷地を越えて 西新宿に与する思想

55 HIROBA のある“9号地”は、新宿駅からの動線に直結し、南北のレベル差をつなぐ副都心の“かなめ”に位置する。ここで敢えて高層棟を北側に寄せ、南側に段丘状の低層部を配置し、サンクンガーデンを中心に設えた配棟計画は、京王プラザホテルの線と一体となって副都心の入口に「ヒューマンスペース」を提供する。この断面構成は新宿副都心開発協議会（SKK）が構想した広場とデッキによる街区を超えた歩行者ネットワークを忠実に担った構成でもあったが、隣接街区へ至るデッキの接続は竣工の12年後の実現となり、副都心全体としても同構想は未完のままである。

陰影に豊んだ 人間的尺度に満ちた空間

新宿副都心は休日人も訪れる場であるべきだ。京王プラザの観察からそう考えた設計チームは、街路を歩く人々を積極的に呼び込み、人の顔が見える距離感で店舗がコの字に広場を囲む「ショッピング・プラザ」として55 HIROBA を計画した。サンクンガーデンの形式は「催し物をしていなくても疎外された感じを持たない」スケール感のもと、多様なシーティングを提供する造形でありながら、吹き下ろす局所風を和らげ、地下階ゆえに課題となる各店舗からの避難を容易にもしている。人間的尺度に満ちたこの広場は、アメリカ視察で訪れたギラデリースクエアの影響を受け、デザインされたという。

相互に応答しつづける 良好な関係

超高層建築群の第一世代が一斉に更新期を迎えつつある。今年45周年を迎える新宿三井ビルディングの改修設計者達は、社会ニーズの変化に柔軟に対応する上で、空間的「余白」や条件的「余力」の重要性を語る。ショッピングプラザを拡充した「55 DINING」や、新たなワークスタイルを提案する内外一体のサードプレイスとなるロビー空間が、余白を生かして近年完成した。人と街をつなぐ生き生きとした広場の思想は、現在も継承され進化している。当初掲げられた超高層ビルによる「都市における人間性の回復」の希求は現在も続く。

“ 超高層ビルはいわば、目的ではなく手段であった ”

『霞が関ビルディング』 1968.4 三井不動産株式会社

1. 霞が関ビルディング（竣工時） 『霞が関ビルディング』 1968.4 三井不動産株式会社

2. 新宿三井ビルディング 提供：株式会社日本設計 ©川登・小林研二写真事務所

6年で次男坊誕生 生かされた余白の開放

『電が関を超えて』

3. 霞が関ビルを長男、新宿三井ビルを「次男坊」と表現した記事（『日刊建設通信』1974.11.5）

副都心と広場…敷地を越えて西新宿に与する

4. SKKのマスタープランで描かれた歩車分離と歩行者ネットワークの断面イメージ（『LIVE! SHINJUKU』1973、新宿副都心開発協議会）

5. 高架道下も連続する12街区全体でのパブリックな歩行者空間をつくる構想「SKK環境整備計画「76」（『SKKレポートNo.15』1979、新宿副都心開発協議会）

6. 55 HIROBA から京王プラザホテルまで、緑のキャンビーが街を覆う（『NHK SHINJUKU』1967-1992、1992、朝日社）

7. 人が佇むきっかけに溢れた広場の造形（筆者撮影）

8. 店舗と広場の融合体「ショッピング・プラザ」（『商店建築』1975.3）

9. ギラデリースクエア（『SD』1969.12、鹿島出版会）

“ 催し物をしていなくても、疎外された感じをもたないですむスケール ”

『新宿三井ビル設計・技術レポート』『建築文化』1975.3

“ 『都市における人間性を回復する』リノベーション ”

10,11. 低層階の余白から生まれた「55 TERRACE」と「55 SQUARE」（筆者撮影）

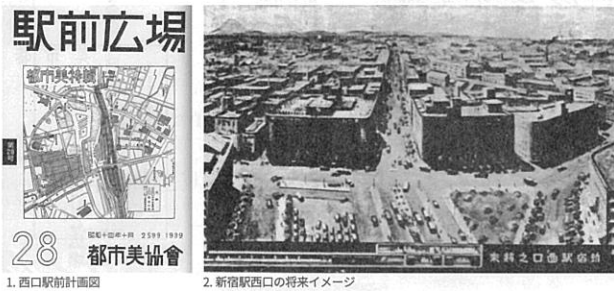
- 1964.8 霞が関ビル 特定街区の認定
- 1968.4 霞が関ビル 竣工
- 1968.11 新宿副都心開発協議会（SKK）が発足
- 1969.4 「新宿副都心開発計画」 SKKがまとめる
- 1970.11 新宿三井ビルディング 建設委員会スタート
- 1971.6 京王プラザホテル オープン
- 1972.4 新宿三井ビルディング 竣工
- 1972.5 新宿三井ビルディング 警備部の方針固まる
- 1974.11 新宿三井ビルディング オープン
- 1986- 新宿住友ビルとの 連絡通路が開通
- 2008- 改修で新たに 55 DINING オープン
- 2017- 55 SQUARE、55 TERRACE の誕生

「駅前広場」

ターミナル駅と周辺開発との接合

街道筋の宿場町から駅中心の繁華街へ。明治、大正を通じた東京の西郊への拡大に伴う新宿駅のターミナル化と駅周辺市街地の開発とを結びつける都市空間として、都市計画は「駅前広場」の造成に着手した。

1932.4 「新宿驛附近廣場及街路」都市計画



1. 西口駅前計画図 2. 新宿駅西口の将来イメージ

「盛り場広場」

繁華街としての新宿復興の中心

駅周辺の都府行の戦災復興土地整理事業に加え、少し離れた角第一丁目でも組合施行の区画整理事業が実施され、中心に広場を有する歌舞伎町が誕生。新宿は戦前をはるかにしのぐ繁華街として復興する。

1948.6 歌舞伎町・コマ劇前広場の誕生



3. 石川栄耀 4. 「舞場広場」の完成図 5. 新宿区総合開発促進会の

戦前に移転が決まフィールドとなって決定する」群

1941 西口に新宿驛前廣場が誕生

新宿は今回の広場の建設に依り一大進展を来す訳であって、広場を中心とした大総合駅と周囲の高層建築は茲に厳然として新宿の中心点を現出する。

小田川利喜・東京市技師 / 1939年『都市美』28号より

1956 淀橋浄水場跡地利用理想都市市街

自分は復興計画で新宿に歌舞伎町という盛り場を作った。広場のある芸能中心としてつくった。それが日本唯一の広場のように思っている。

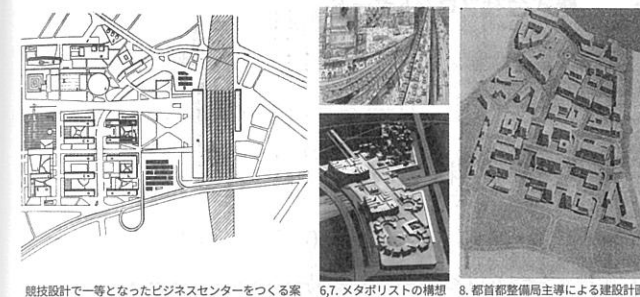
石川栄耀・東京都建設局長 / 1956年『余談亭らくがき』より

「理想広場」

浄水場移転をめぐる諸構想

っていた淀橋浄水場は、プランナーが新しく理想の市街地像を構想する格好のた。メタボリストは「アミューズメントスクウェア」で「広場のデザインが全造形を提示するなど、そうした構想の多くで広場への言及を見ることができる。

1960 大高正人+横文彦の新宿副都心計画



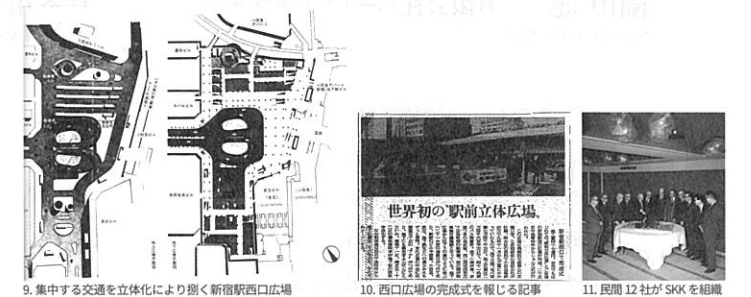
競技設計で一等となったビジネスセンターをつくる案 6.7.メタボリストの構想 8.都府都整備局主導による建設計画

「立体広場」

副都心開発のためのインフラ

1960年代、都市計画は特定街区や容積制という新たな制度を導入し、副都心の都市開発は立体化を前提に動き始める。更なる爆発的な交通需要をいかに捌き、それを都市開発とどうバランスさせるかが構想され、公共空間と広場にも立体化の概念が導入されることになる。

1966 新宿駅西口広場の完成



9. 集中する交通を立体化により開く新宿駅西口広場 10. 西口広場の完成式を報じる記事 11. 民間12社がSKKを組織

地建設計画競技設計

1960 新宿副都心の初期構想案公開

1968 新宿新都心開発協議会 (SKK) 発足

今までの線的、平面的な即ち一次的、二次元的都市計画から空間的、立体的な三次元都市計画への脱皮である。

山田正男・東京都都整備局長 / 1960年9月『道路』より

この『水と光の広場』が、やがて生まれる新宿副都心の表玄関として、永く市民に親しまれるものとなることを、われわれは心から願っている。

東孝光・坂倉三建築研究所 / 1967年2月『建築設備』より

「群衆広場」

人々が求めた自由な新宿

西口地下広場の反戦フォーク集会は、群衆が広場を求めて集い、やがてその自由が排除されるという画時代的現象であった。人々にとって、広場とは何なのだろうか。新宿の街はそのような議論を喚起する一種のプラットフォームとなっていた。

1970 新宿東口で歩行者天国スタート



12. 反戦フォーク集を経て、広場から通路に看板を書き替えられた 13. 歩行者天国1周年記念行事

1969 「西口地下広場」は「西口地下通路」に

新宿を素通りの街にはいけない。トンネルや通路にはいけない。新宿は、大東京のなかで、ただ一個所の「広場」の世界なのだから。

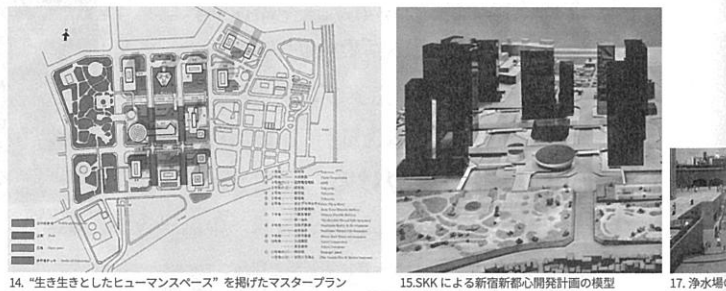
小山内宏・評論家 / 1970年『新宿 PLAYMAP』より

「足元広場」

超高層ビル街のオアシス

高層化する都市環境の計画においては、その足元に生まれる広大なオープンスペースこそその計それが本当に人間的環境たり得るかどうかを、計画者のみならず利用者も含め模索する実験的舞舎竣工を以って完了して以降も、周辺一帯に超高層+足元広場型の再開発が波及。足元広場のあ

1974 新宿三井ビルディング・



14. 「生き生きとしたヒューマンスペース」を抱いたマスタープラン 15. SKKによる新宿新都心開発計画の模型 17. 浄水場の

1973 新宿新都心開発協議会による構想発表

『広場の思想』にもとづいて、オープンスペースを充分にとり入れた、この新しいまちには人間くささにあふれ、はつらつとした都市空間を生みだすでしょう。

新宿新都心開発協議会・1973年『LIVE! SHINJUKU』より

都市環境の立の主な計画対の影響圏とし

池田武

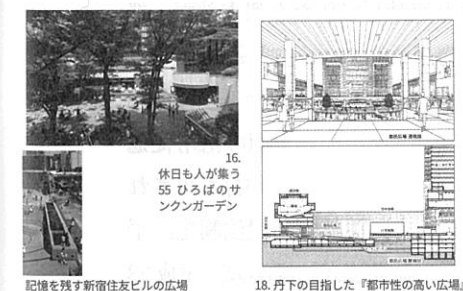
「活動広場」

広場のリノベーションとパブリックライフ

画の主な対象とされるべきである。新宿副都心の広場群は、台でもあった。旧浄水場跡の11街区が1990年の新都庁り方とその連携は普遍的なテーマとなっていく。

現代の新宿が探し求めているのは「豊かなパブリックライフの広場」であろう。公共空間の活用、「場づくり」、エリアマネジメントとの連動、超高層ビルのリノベーション等、その方法論は多岐にわたっている。

55 ひろばオープン



16. 休日人も集う55ひろばのサンクンガーデン 18. 丹下の目指した『都市性の高い広場』

1985 新都庁舎コンペで描かれた数々の広場

場からみれば高層建築によって得られた余白空間こそそ象となるものであり、その空間は当然、直接・間接にそ対象敷地外に対してある広がりをもって存在している。

邦・日本設計事務所 / 1974年2月『建築雑誌』より

1995 モア4番街でオープンカフェの実験開始



19. 社会実験を経て公道常設カフェとなったモア4番街 20,21,22. イベントスペース化、大屋根を掲げる足元広場改修、パークレットの試みなど

2005 公共空間活用の多様な展開

『官民オープンスペース』を快適で過ごしやすい空間へと改良し、そこでの活動『パブリックライフ』を充実させるアプローチ。

西新宿懇話会・2014年3月『西新宿まちづくり指針』より

※ 国図出版 1,2 都市美 28号復刊版 1939、都市美協会 / 3 石川栄耀『余談亭らくがき』1956年、余談亭らくがき刊行会 / 4 鈴木嘉兵衛『歌舞伎町』1955、新宿第一復興土地整理組合 / 5 『新宿経済年鑑』1956、新宿経済会議所 / 6,7 展覧会図録『建築と社会を結ぶ-大高正人の方法』2016 / 8 山田正男『新宿副都心計画の全体像』『道路』1960年、日本道路協会 / 9 『現代日本建築家全集』11 坂倉三三、山口文象とRIA』1971、三一書房 / 10 読売新聞 1966年11月25日夕刊 / 11 『LIVE! SHINJUKU』1973、新宿新都心開発協議会 / 12 『新宿の1世紀アーカイブス』生活情報センター、2006 / 13 『新宿 PLAYMAP』新宿心新宿 PR 委員会、1971.8 / 14,15 『LIVE! SHINJUKU』1973、新宿新都心開発協議会 / 16 筆者撮影 / 17 『商店建築』1974.6、商店建築社 / 18 『東京都都庁舎・指名設計競技応募案作品集』プロセスアーキテクチャ特別号 4、1986 / 19 朝日新聞 2012年11月5日夕刊 / 20 西成典久氏撮影 / 21 『第59回新宿区景観まちづくり審議会資料』新宿区、2016年 / 22 新宿モール&パジャコ計画歩きたくなるまちづくり2018ホームページ

※ 本展示は、三井不動産株式会社から会場および運営面で、株式会社日本設計から資料面で多大なご協力を頂いた。心より感謝の意を表したい。